

ドイツでの留学生活について

3年4組39番 寄本怜花

Keywords: 「留学」「ドイツ」「挑戦」「異文化理解」「多様性」

1. はじめに

私がドイツに留学に行こうと思ったきっかけは、将来のために英語だけでなく他の言語も習得しておきたかったからだ。そこから、国際高校で学んでいる第三言語であるドイツ語はもちろん、英語の教育水準が高いため、第二言語も同時に向上させることができるドイツが良いと考えた。

2. 序論

私は2023年9月～2024年7月の約10ヶ月間、ドイツのバイエルン地方ヴァイルハイムに留学していた。本論ではドイツでの私の体験を、約三ヶ月ごとに前期、中期、後期に分けて、それぞれの期間に挑戦したことと、その挑戦から得られたことを述べていく。

3. 本論

①前期(9月～11月)

前期での挑戦はドイツで手術をしたことだ。私は留学を始めて1週間目に左膝を脱臼し、その1ヶ月後に、医師から手術をする必要があると言われた。その際に、日本で手術をするか、ドイツで手術をするかを聞かれた。私が参加した留学団体は、大怪我をした場合留学を中止しなければならなかった為、日本で手術をすれば、留学は中止しなければならなかった。その為、私はドイツで手術することを選択した。手術までの段取りや保険会社、留学団体への連絡を全て英語で、また自分1人で行わなければならなかった為、英語はもちろん責任感や忍耐力もこの挑戦から得ることができた。

②中期(12月～2月)

中期での挑戦は、自分が思っていることや困っていることをホストファミリーとしっかり話し合ったことだ。留学前期は、自分が思っていることを、ポジティブな内容は伝えることができていたが、ネガティブな意見は伝えられていなかった。というのも、ホストファミリーによく前年受け入れていた留学生が良くなかったと聞かされていたので、不満を伝えるとホストをやめてしまうかもしれないと考えたからだ。加えて、自分の怪我のせいで一般的なホストファミリーの仕事以上のことをしてもらっていたことに対する負い目もあった。そのため、何か問題があっても我慢してしまっていた。しかし、そのままでは私にとってはもちろん、ホストファミリーにとっても良くないと考え、クリスマス前にホストマザーに自分が困っていることを正直に伝えた。とても緊張したが、ホストマザーは真剣に聞いてくれて、そこからホストファミリーと本当の家族のように仲良くなることができた。この挑戦からは、しっかりと自分の意思を伝えることが円滑な人間関係に繋がるということを学ぶことができた。

③後期(3月～7月)

後期での挑戦は、帰国前日まで修学旅行に参加していたことだ。私の帰国日は7/7だったが、修学旅行が7/1～7/6まで予定されていた為、ホストファミリーや両親の後押しもあり参加することに決めた。担任の先生が英語が堪能でない為、緊急時も全てドイツ語で話さなければならないことや、既に成人年齢に達していた為、全て自己責任で参加しなければならない

いことから、私は参加に前向きではなかった。特に、帰国日はフランクフルトという街に行かなければならないのに対し、修学旅行先は首都ベルリンで、その間の移動や乗り物の手配も全て自分でしなければならなかったことが不安の要因だった。しかし、体験できることは何でもトライしようということを留学中のモットーとしていた為、最終的に参加を決めた。そして友達たちとの修学旅行は留学生生活を最高の思い出で締めくくってくれた。この挑戦から、不安で大変な状況でも、努力すれば良い結果につながることを強く実感した。



4. 結論

留学体験は、高校生活の中でも最高の思い出になり、多くのことを学ぶことができた。私は留学で学んだことを、国際社会で活躍するための糧とすることで、自分の将来に活かしていきたいと考える。また留学前には、英語よりもドイツ語をもっと勉強しておくべきだったと感じた。留学に行くことは異文化理解や多様性を深めることのできるいい機会だと思う。

5. おわりに

私の論文を読んで他の人々も留学に興味を持ってほしいと思う。そのことが、今後グローバル化していく世の中で日本が必要な人材を育てることにつながると思うからだ。